

2022 年度

近畿支部

親と子の都市と建築教室

### 「京町家の伝統技術を学ぶー小舞編みと土壁塗り」終了報告

この教室は、京都の町家に今も息づいている伝統技術のひとつである「土壁」について、親と子が共に実際の土壁塗りを体験し、学ぶことを目的とした企画である。今回で18回目となり、夏休み終盤の土曜日である8月20日に、コロナ禍での慎重な感染対策の下で開催された。この企画は、学校法人京都建築学園 京都建築専門学校と本会当支部との共催事業であり、同校の佐野春仁校長と京都府左官技能専修学院の佐伯護学院長に講師をご担当いただいた。

この教室の特色は、参加者が実際に自らの手で土壁の下地となる竹小舞を編み、その上に土壁を塗るという経験ができることにある。教える人、道具、材料、すべてが本物であり、京都の伝統的な建築技術や、それらを支える職人の技を垣間見ることができる。

“京都市こども若者はぐくみ局”の広報誌「あつまれ！京（みやこ）わくわくのトビラ」や本会会報などで広報し、また回を重ねることでこの教室が知られてきたこともあり、今年度も定員を超過しての応募があった。当日は体調不良によるキャンセルも数組あったが、全部で12組25名の参加のもとで開催された。

今年度は例年とは異なりコロナ対策として密を避けるため、京都建築専門学校の本校舎3階教室が集合場所となった。午前10時に谷口支部長による開催挨拶と共にスタートし、次に満田常議員から参加者に向けて「土壁のお話し」として土壁の性質についてのミニレクチャーが行われた。その後、参加者による自己紹介と佐野校長による行事内容の説明が行われた後、本校舎1階ピロティの作業場へ移動し、佐野校長から竹小舞の編み方の説明が行われた。あらかじめ準備された木枠は畳1畳大の大きさ（三段貫）で、その中に竹小舞を縦横に配列し、わら縄で編み上げていく。7台用意された木枠に参加者が分かれて、講師の先生方や京都建築専門学校の学生スタッフに指導を受けながら、親子で協力して小舞を編み上げた。

昼食後には、2班に分かれて京都建築専門学校の「よしやまち町家校舎」を見学した。「よしやまち町家校舎」は京都の庶民的な町家の伝統的な形態を今に伝えるものであり、校舎自身が教材になっている。子供たちは押入と思いきやと扉を開けた場所に現れる階段に驚きつつも喜んで駆け上がり、保護者は京町家に潜む先人達の優れた知恵を丁寧に語る佐野校長の説明に耳を傾け、その一つ一つに大きく頷いていた。

見学後、再び本校舎に戻り、午後は土を竹小舞に塗る作業を行った。左官職人である講師の佐伯先生から、投げられた壁土の受け方、鏝の扱い方などを一通り学んだ後、荒壁塗りに挑戦した。始めは土を塗り付けるのに苦労する子どもも多かったがすぐに慣れ始め、全員泥だらけになりながらも楽しく真剣に土壁塗りに取り組み、1時間半ほどで

荒壁を完成させた。最後に講師の佐伯先生に中塗りを実演いただいたが、その美しい饅  
さばきを子供たちは真剣な眼差しで食い入るように見つめていた。

終了後は本校舎3階の教室に戻り、まず参加者全員が今回の感想を述べ合った。次に、  
ボランティア参加の京都工芸繊維大学の学生（加芝亮君（大学院1年）と辻英吾君（4  
年））により、解説スケッチを使った午前・午後それぞれの作業の振り返りが行われた。  
さらに「ちびっこ親方」としての修了書が西野常議員より参加した子ども全員に授与さ  
れた。最後、佐野校長からの閉会の挨拶を頂き17時に閉会した。

講師の方々、京都建築専門学校、京都工芸繊維大学の学生をはじめとするボランティ  
アの多大なご尽力のおかげで、今年も非常に有意義な教室とすることができた。

日本建築学会近畿支部 常議員  
満田衛資、西野佐弥香



親と子の都市と建築教室「京町家の伝統技術を学ぶ」

※荒縄で竹を編むところから荒壁塗りまでを子供たちが中心となって作っている。